

教えて センセイ

中井精一先生に聞く〈関西弁の話〉

磨かれた関西弁で、相手の気持ちをくすぐり和ませ、言いたいこともはつきり言う。関西人の言語行動レベルは、非常に高い！

共通語の土台をつくったのは、関西弁だった！

私たちが日常的に使っている「関西弁」。学術的には「近畿方言」と呼ぶのが正式です。「関西」という言葉は比較的新しく、元来は「近畿」や「畿内」と呼んでいました。近畿の「畿」は「都」を意味し、近畿とは「都の近く」という意味。都とは天皇陛下がいらっしゃるところです。そのため、おそらく東京の人たちから「首都は東京。天皇もいらっしゃらないのに、いつまで近畿都の近く」と言っているんだ」といった圧力がしだいに強まって、関東に対して「関西」と呼ぶようになります。こちら近畿でも自ら「関西」と多くの人が言うようになり、方言研究の世界でもここ30年ほどの間に「関西」そして「関西弁」と呼ぶようになりました。

関西弁が話されている範囲とは、「京阪式アクセント」を使っているエリ

に出ても関西人が関西弁を貫くのは、関西の流儀がどこでも通用すると思つてはいるから。それで、東京の人とぶつかったり嫌われたりするんですけどね（笑）。

また東京の言葉、共通語は関東の言葉だと思われていますが、本当のことを言うと関西弁が基盤になつていてるんです。明治時代になると、京都のお公家さんという生粋の関西人をはじめ、関西の財界人、西日本の維新の功臣らが大挙して東京に入り、日本の社会の骨格をつくりました。と同時に、彼らが移り住んだ東京の山の手に関西弁を持ち込んだのです。東京の山の手は日本のアッパークラスが住む場所で、そこでは「お寒うござります」のような上方的表現が使われ、「ふすま」「うろこ」「塩辛い」など多くの関西弁の語彙も使われました。こうした東京の山の手で話されていた言葉をモデルとして、共通語の基盤としたのです。だから、関西弁を抜きに今の東京の言葉、共通語は存在しないんですよ。

注意したいのは、関西弁が伝わったのは東京の山の手に限った範囲で、東京の下町や関東各地の言葉はまったく別物です。

お商売のまち・大阪では、敬語を合理的に単純化

関西弁の大きな特徴に、敬語が非常に発達している点があります。近所の知り合いで、「もうすぐ先生が来る」とき、「来る」をどう言うかを全国調査した結果を見ると、東日本では「来る」が64%、半数を超える人が敬語を使っています。西日本で敬語を使わないのは22%にすぎず、「来られる」「来はる」「来てや」など、多彩な敬語が使われています。特に、京都、大阪の中北部などの地域ではたくさんの敬語表現が使われます。

私は関西人がこれだけ敬語を巧みに使えるのは、大阪がお商売のまちだからと考えています。天下の台所、日本流通の拠点・大阪では、相手の気持ちをくすぐつたり和ませたりしながら、最終的にはきつちりと値段交渉もしなければなりません。そこには敬語を含めた豊かな言葉が必要なんですね。全国的に見ても、古くから貨幣経済が発達した地域は、敬語も発達しています。そこで、関西でよく使われる敬語のひとつ「はる」について、京都と大阪の使い方の違いを見てみましょう。たとえば、「行く」は京都では「行かれる」、「行く」の「く」をア段の「か」に変えて接続しています。大阪の中心部

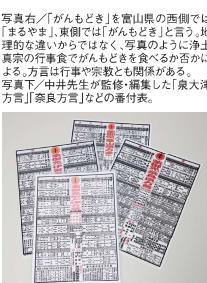
アで、おおよそ大阪・京都・兵庫・奈良・滋賀・和歌山そして三重県です。京阪式アクセントとは、語頭が高い「風」「かぜ」（高・高か、低い「糸」と「低・高」）か、「川・かわ（高・低）と下がるかを区別するアクセントです。東京式アクセントでは、かぜ（低・高）、いと（高・低）、かわ（低・高）となります。京阪式アクセントの地域では、蚊（かあ）名（なあ）田（たあ）のように一拍語は長音化する傾向もあります。

東京式アクセントと聞くと、東京だけで使用されているように思います。が、関西の西側の岡山県や広島県、東側の愛知県以東など広い地域で、京阪式アクセントの地域を挟むような格好で使用されています。この状態を方言の世界では、京阪式アクセントが中央、都のアクセント、東京式アクセントは周辺の田舎のアクセントと解釈します。関西人は表立って言わないけれどどこかで自分たちが日本の中心だと今も思つて生きています。東京



中井精一さん
(なかいせいいち)

同志社女子大学・表象文化学部 日本語日本文学科 教授。専門は、方言研究・社会言語学。1982年、奈良県生まれ。大阪府立国語大学大学院修了・修得論文「中井精一著『京阪式アクセント』」。富士大学・大阪市立大学教授を経て、2013年に現職。主に方言の言語行動・関西の方言・関西の方言（方言和歌）、「西日本事典」（ひじ書房）、「大阪のひととこと」（角川書店）などを執筆。奈良の中学時代は学生でトートボート（しゃべり）を自作していましたが、「大阪の高校に通った子とせいぜいクラスで10番くらい」。大阪人として喜んで勝てたんだと思つています。



写真左「がんもどき」を富山県の西側では「まるやま」ではなく、眞夏のよう。浄土真宗の行事事例で「がんもどきを食べるか否か」による、方は行事や宗教との関係がある。
写真下「中井先生が監修・編集した「泉大津方言」「奈良方言」などの番付表。



共著「地図で読み解く関西のこと」。関西の特徴などが詳しくわかる！